

## 鹿児島県人の進取の気性

---

小 島 摩 文

### はじめに

1609年の島津藩による“琉球征伐”以前から、琉球と鹿児島は盛んに交流があり、沖縄の人々にとって鹿児島は、何よりも最も近いヤマトであり、そして日本への玄関口であった。

近代に入ってからでも、航空路が開設されるまで、日本のどこに行くにも先ず鹿児島に船で上って、場合によっては宿泊し、それから目的地に船や鉄道などで向かうというのがごく普通の沖縄からの旅のありかたであった。

しかし、1970年代に沖縄で育った私にとって、海を隔てた鹿児島は身近な県とはいえない存在であった。飛行機で一足飛びに東京に行ける時代になり、鹿児島県は隣の県でありながら、遠い存在に感じていた。

1991年に鹿児島大学の研究生になり、私が鹿児島に住むようになってから、沖縄の親戚や年配の知人から、鹿児島のことを聞く機会が多くなった。鹿児島のどこどこにいたことがあるとか、鹿児島にはこんな友人がいるとか、普通の人々の中に、おどろくほどの鹿児島の話題が隠れていた。明治生まれの祖母からも、那覇で定期的に巡回して臨時の店舗をひらいていた山形屋の思い出話を聞かされた。

鹿児島は沖縄にとって隣県ではあるが関係は遠い県だと思っていた私は、あらためて、多くの沖縄県人が鹿児島とのなんらかの縁をもっていることに気づかされた。

鹿児島と縁ができる以前、私は鹿児島に対して「保守的」なイメージを抱いていた。鹿児島県人の一般的なイメージである質実剛健とか男尊女卑ということから「保守的」だと思ったのだろう。ここで保守的というのは、古い物を大切にすることということで、逆に言えば新しい物を取り

入れないという意味である。そして、その鹿児島に対するイメージは、鹿児島に来てからもそれほど変わらなかった。

たとえば、先輩後輩の秩序を非常に重んじる態度であるとか、私と同世代の学生が父親に敬語をつかっていることとか、調査に訪れた家で夫の目の前で電話が鳴っているのに夫は微動だにせず、離れた台所から妻が急いで駆けつけて電話をとることなど、それまで私が知っている日本とは異質の日本を鹿児島に感じた。

鹿児島に住むようになる以前にいただいていた「保守的」なイメージは、実際に鹿児島を知ると、ますます強固なものになった。

### 伊波普猷の鹿児島体験

鹿児島に住むようになったある日、私は伊波普猷の「一琉球人の薩摩観」というエッセイに出会った。伊波普猷は明治9（1876）年に那覇に生まれ、後に沖縄学の父とよばれるようになった学者である。東京大学で言語学を学び、沖縄に帰ってからは沖縄県立図書館の館長を務めるかわら、沖縄研究をおこなった。言語学にとどまらず、文学、民俗学、歴史学、宗教学など幅広い学問領域を横断するように沖縄研究に邁進した。

柳田国男などとも交流があり、たびたび上京していた。その道すがら、鹿児島にも滞在する機会が多かったようだ。

伊波のエッセイは、「私は薩摩と琉球との歴史的関係を研究したり鹿児島県人とつきあったりして、薩摩を比較的に能く諒解していたつもりでしたが」大正12年の夏、10日ほど鹿児島に滞在し、「今までわからなかった部分、しかも肝心なところがわかったような気がする」という文章ではじまる。

そして、まず伊波は、「外来者の目に最初に映ずるのは、薩州人が非常なハイカラだということです」と述べ、言い換えれば「進歩的」だと評価している。これは伊波が訪れた大正12年当時の特徴というだけでなく、昔からの薩州人の特徴だという。その例として伊波は、「今年（大正12年 引用注）の五月に出来たという磯の集成館」を例に挙げている。尚古集成館は大正12（1923）年5月22日にオープンした。尚古という名称がしめしているように、幕末の「集成館」を顕彰する施設である。

嘉永4（1851）年2月に鹿児島藩主になった島津斉彬は、藩ひいては日本の近代化のために産業革命以降のヨーロッパの工業技術を導入し、造船、反射炉・溶鉱炉の建設、ガラス製造、ガス灯の設置などを行った。この殖産興業の中核施設となったのが島津家磯邸に隣接した土地につくられた集成館であり、鹿児島藩の近代化事業全体を集成館事業とよんでいる。

伊波普猷は、この集成館事業が「薩摩の誇りであるばかりでなく、日本の誇りだ」と誉め讃え、鹿児島県人がもっている進歩的な性格のあらわれとして賞賛している。

しかし伊波は、世の中に鹿児島人ほどお国自慢のひとたちはいないと、やや皮肉な口調で続けている。そして、そのお国自慢の中身は、鹿児島の「軍国主義的の歴史や西郷南洲などを誇ります」といい、その裏返しとして、鹿児島県人は自分たちの「文化的事業を了解することが出来ず、従って誇ることも出来ないのです」と非難している。

伊波は、鹿児島県人が郷土の文化に無関心である例として、鹿児島県人の中で『南聘紀考』『漢学紀源』の著者の名を知っている人が何人いるだろうか、植物学者にして土俗学者であり、当時台湾で暮らしていた田代安定の名を知っている人は恐らくいないだろうと嘆いている。

また、「鹿児島にあって驚いたことは、薩州人がその郷土の地理に暗いことです。川辺郡の久志は浄土真宗が薩摩に伝播する苗床みたいな所ですが、真宗の信者でさえこれを知っている者が少ないのは不思議なことです」とも述べている。

そして鹿児島県人は「立身出世に重きを置き過ぎて、自分の郷土を知る暇がない」のだろうと結論づけている。

ここに出てくる『南聘紀考』『漢学紀源』の著者は伊地知季安。島津家をはじめとする鹿児島藩諸家に伝わる文書類を収集、書写、整理した『薩藩旧記雑録』を編纂したことで近年よく知られている。

集成館事業や西郷隆盛は知っていても、伊地知季安や田代安定の名前を知っている方は現在の鹿児島にどれくらいいるのだろうか。あるいは、名前は知っていても、この二人が郷土の誇りだと考えている方はどれくらいいるのだろうか。伊波がこの二人の名前を取り上げたのは、それぞれが沖縄とゆかりが深いからだだろう。そういう観点からみると、鹿

児島県人より、沖縄の歴史に関心がある人の方がこの二人の名前をより知っていても不思議ではない。

しかし、伊地知季安と田代安定はそれぞれの時代における偉大な業績を残した学者である。西郷隆盛以上に、とは言わないまでも、西郷隆盛とならんで、郷土の偉人として鹿児島県人が大いに誇っている人物である。

伊地知季安は、島津斉宣とその父重豪の政争、いわゆる近思録崩に連座し喜界島に遠島、鹿児島にもどった後も役を与えられることがなかった。この間、藩内の記録類を渉猟し、書写整理を行い過ごす。藩内外で徐々に歴史家としての評価が高まり資料収集などに関して協力者も現れるようになる。しかし、1843年には、藩命により著作をすべて取り上げられることになるなど苦難は続いた。20代で罷免・遠島された季安が弘化4（1847）年に軍役方掛に任命された時にはすでに60代後半になっていた。嘉永5（1852）年には記録奉行に任命された。

旧鹿児島藩領内の平安時代末期より明治時代までのさまざまな史料を編年で集大成した『薩藩旧記雑録』は、伊地知季安の没後も息子の季通の手によって明治30年頃まで編纂、修正が続けられた。記録は単なる書写だけでなく考察、考証を「按」「考」として記している。初代島津忠久から明治の当主忠義にいたる約700年におよぶ文書群を親子二代約80年にわたって編纂したことになる。西南戦争などで失われ現存しない資料も多く、『薩藩旧記雑録』がなければ、内容が今日まで伝わらなかった文書もある。鹿児島の歴史を知る上で伊地知季安は恩人ともいえる人物である。

伊波が挙げた『南聘紀考』は薩摩国と南島・琉球国との交渉を記した編年体の史書で、推古天皇15（607）年から書きおこし、天保3（1832）年までを記録している。琉球と鹿児島との関係を知る上で貴重な資料となっている。

田代安定は、安政4年に現在の鹿児島市加治屋町で生まれた。明治2年に柴田圭三の塾に入門、明治5年、柴田が造士館のフランス語の教授になったのを期に、造士館に移った。明治7年には上京し、翌年、内務省の博物館掛になる。田中芳男の下で植物学の研究をし、日本初の動植物目録の作成に関わる。その間、種子島や沖縄の調査を行った。

明治13年には、母親の死にともない帰郷し、鹿児島県勸業課陸産係となった。明治15年には農商務省より沖縄県の調査を命じられ、先島諸島の調査を行う。

明治17（1884）年には、ロシア帝国サンクトペテルブルクで開かれた園芸博覧会の事務官として派遣され、博覧会が終わったあともロシアに残り、植物学者と交流した。

ヨーロッパ滞在中に当時清国と交戦中のフランスが宮古島に海軍病院を建設する計画を知り、帰国するや、八重山群島の日本の領有権を主張する建議書を国に提出し、国は県知事の交代をするなど対策を講じた。その後、沖縄県の先島諸島の自然、文化の総合調査を行った。1年近く先島諸島に滞在した後、帰還し農商務省・内務省に報告書を38冊提出した。その後東京大学より南海諸島植物及び人類学上の取調を嘱託され、再び先島諸島に渡った。さらに明治22年にはハワイ、ファンニング、サモア、フィジー、グアムなどの島々の調査に従事した。明治28年より台湾総督府に勤務、農林業の分野の技官として活躍した。大正4年に退官、その後も大正13年まで嘱託として奉職した。その間、明治44年から大正5年まで、嘱託として鹿児島高等農林学校で熱帯植物の講義をしている。引退後も台湾の自宅で研究を続けた。昭和3年1月に上京し、東京大学の人類学教室を訪ねるなどし、その後3月に鹿児島滞在中に亡くなった。台北市三板橋の墓地に埋葬された。五千円札の肖像でよく知られた新渡戸稲造は台湾総督府殖産局長時代に田代安定の上司であった。安定の亡くなった翌年には稲造の揮毫による碑が建立された。（長谷部1945）

没後、昭和20年に東京大学教授で人類学者の長谷部言人の校訂により『沖縄結縄考』が刊行されている。田代安定は海外、植民地など地球規模で活躍した人物である。

伊地知季安も田代安定も決して恵まれた環境とはいえない状況の中で、忍耐力をもってこつこつと学問を続けた人たちだ。伊波普猷はこうした学者を大切にしない鹿児島の土地柄を嘆いたのであろう。

この原稿の校正中、私は台湾に滞在していた。ホテルのロビーで入手した無料の日本語雑誌の「台湾に残る日本の神々」という連載に田代安定が紹介されていた。生地鹿児島では忘れられても活躍した沖縄や台湾

では今もお慕われていると感じた。

### 石橋問題と伊波普猷

私が伊波普猷の「一琉球人の薩摩観」を読んだのはちょうど「石橋問題」の頃だった。石橋問題のご記憶の方も多いと思うが、1993年の8.6水害で甲突川五石橋のうち新上橋と武之橋が流失し、度重なる決壊災害から、すべての石橋を撤去すると鹿児島県が判断したことに対して市民が反対運動を起こした出来事である。木原安妹子他著『かごしま 西田橋』（南方新社）が当時を詳しく伝えている。

この鹿児島の五石橋は、天保11（1840）年に、肥後の石工、岩永三五郎が築いたものである。岩永三五郎を鹿児島に招いたのは、鹿児島藩の財政難を解消したことで知られている調所広郷である。調所は藩の財政改革をするにあたり、各地を視察しているが、肥後を訪れた際に岩永三五郎の働きを知り、石橋の架橋のみならず鹿児島の町作り全体の企画・施工を三五郎に託す決心をする。現代的ないいかたをすれば「まちづくりプランナー」のような仕事だろう。

岩永三五郎は、その後、昭和まで続く日本における石橋建設の基礎を築いた人物で、彼の建設した石橋は土木史上重要な意味を持っている。その中でも鹿児島の甲突川にかかる五つの石橋は、参勤交代で藩主が使用する西田橋を筆頭に当時の土木技術の粋が集められたもので、日本が世界に誇るべき文化遺産というべきものであった。

岩永三五郎自身は肥後の人であるが、鹿児島側で補佐をした阿蘇鉄矢や、そもそも三五郎に事業を託した調所広郷の卓見あってのことで、石橋そのものは鹿児島県人が郷土の宝として大いに誇ってよいものであった。

三五郎が得意としていたアーチ型の石橋は現在の土木技術の水準でも非常に強い構造体と認識されており、地震にも強く、人為的に破壊するか、洪水で岸や川底ごとえぐられない限り壊れないとされている。

実は、すでに昭和21年に鹿児島市戦災復興街路計画の段階から石橋撤去は案件となっており、昭和35年には鹿児島市の助役が「市民を守るためや市が発展するためには、天下の名橋といえども破壊せねばならない。建設の宿命だ」とコメントしているという（二宮 1992：194）。五

石橋は撤去案が出ては、それに対する反対運動がおこり、ということを経り返してきた。土木史が専門の二宮公紀は「甲突川に架かる五大石橋は4連または5連の連続石造アーチ橋という、日本では他に見ることのない壮大で優雅なものであり、土木史跡としての価値も非常に高い物である」としている（二宮 1992：191）。そして、文化財としての価値が高いにもかかわらず、現地保存するための方策を行政が全くとっていない状況を「どれかの橋が破壊されるまで待っているかのようなのである。五大石橋を見殺しにしていると言っても過言ではない」と強く批判している（二宮 1992：196）。この批判がまさに新上橋と武之橋が流失する前年の指摘である。

五大石橋について、県の土木部長が「文化財を作っているわけではない」といったそうだが、市民の安全が第一とか言う前に、そもそも残そうという考えがないように思える。

思い返せば、明治初期の廃仏毀釈にしても、最も苛烈を極めたのが鹿児島県だという。寺という寺を焼き尽くし、仏像・仏具を破壊した。神仏分離令は日本中に出されたのだが、なぜ、鹿児島がもっとも激しかったのか。さまざまな理由がいわれてきているし、その多くはその通りなのだと思う。しかし、その根底には、進歩的なあまりに過去のものを大切にしない心性がそもそもあったのかもしれない。

神仏分離令にたいする地域ごとの対応は様々である。当時の県知事である県令の考え方によるところもあるだろう。また、地域の人々の考え方もあるだろう。江戸時代の仏教と神道との関係のありようもあるだろう。多くの県や地域では、どこかで、なにかが廃仏毀釈へのブレーキになっていたように見えるのだが、鹿児島の場合は、そのブレーキが無かった。

2001年に、アフガニスタンのバーミヤンの大仏がタリバン勢力に爆破され、世界中から非難されたが、日本における廃仏毀釈も仏教文化財の破壊という点では全く同じことである。自分たちの信念のためには、他のものは何も尊重しない、という絶対主義的な態度である。鹿児島の石橋問題も根っこには同様の問題が横たわっている。

伊波普猷が指摘した進歩性は、良い面で見れば社会を推進する大きな力になるが、一方で自分たちの足元の文化を大切にしない、過去を顧み

ない、歴史を学ばない傾向を生み出す。

## Scrap and Build

明治維新は鹿児島県人の進歩性が遺憾なく発揮された機会だった。もちろん鹿児島藩だけで倒幕・明治維新を成し遂げたわけではないが、その大きな中心であったことは間違いない。しかし、廃仏毀釈だけでなく、明治維新そのものが新しい社会の創造であっただけでなく、一方では破壊でもあった。

鎌倉時代以来続いてきた武家社会の破壊であり、壮大な文化破壊であり、価値の破壊、転換であった。それは大きな世界的な時代の流れでもあったが、中心になってすすめたのは鹿児島の人たちだ。破壊と創造は対極的でありながら、しかしそれはできごとの裏表でもある。伊波普猷が感じ取った鹿児島人の進歩性と文化や歴史を大事にしない体質もおなじ志向性の裏表の二つの側面と見ることができる。

鹿児島の進歩性を体現した二人の人物がいる。一人は、岩谷松平、もう一人は山本実彦である。二人とも鹿児島出身、さらに同じ旧川内市の出身である。この二人は、日本の広告史をひもとくとき必ず登場する現代の広告の基礎を作った人物でもある。

ともに破天荒な人物で、独創性に富んだ商売と宣伝を展開した。

岩谷松平は嘉永3（1850）年に、現在の薩摩川内市向田で生まれた。商売をしていたが、西南の役で西郷軍にも官軍にも家をあらされ、一念発起して上京する。1877年に銀座に店をだし、主に鹿児島県産品を扱った。このときから、新聞に広告を出すなど、すでに広告に強い関心を持っていたという。横浜で紙巻きたばこを吸っている外国人をみて、これからは紙たばこの時代がくると直感し、紙たばこの製造販売をおこなう。これも鹿児島県産の葉たばこの活用の一環だったと考えられる。当時はまだキセル全盛の時代で、紙巻きたばこは紙くさくてまずいといわれていた。

松平は天狗たばこというブランドで、紙たばこを販売し、馬車を仕立てた広告隊、半裸の女性のポスターなどつぎつぎと奇抜な広告とおまけなどで、紙たばこの売上をのばしていった。ライバルとの競争などもあり、たばこ産業自体が巨大産業となっていく。



松平自身が広告塔になり、自宅から店までの出勤の際には赤塗りの馬車に、赤い衣装で沿道の人々を驚かせた。戦前戦後、女優として活躍した森赫子は松平の孫で、ちょうど屋敷も真っ赤に塗り直したときに生まれたので「赤」を二つ重ねて「赫子」と名付けられたのだという。

松平は、銀座の店に女性の店員をおいた。江戸時代から店頭に出ているのは小僧さんと番頭さんなど男性ばかりであったのを、日本ではじめて女性店員を使ったのが松平なのだ。今では、店員さんといえば女性の方が圧倒的におおいが、その先鞭は鹿児島県人が付けたのである。また、松平は、たばこのパッケージ印刷やおまけのカードの印刷などにも資金を投入し、日本の印刷技術の向上に大きな貢献をしたことでも知られている。

もう一人の山本実彦は1885年、現在の薩摩川内市大小路で生まれた。出版社改造社を創業し、雑誌『改造』を発刊した。雑誌『改造』は、現在も刊行されている『中央公論』と並んで日本を代表する雑誌であった。そこから多くのベストセラーも生まれた。大正時代最大のベストセラーである賀川豊彦の『死線を越えて』をはじめ、志賀直哉の『暗夜行路』、森光子の舞台で有名な林美美子の『放浪記』などなどが雑誌『改造』に連載され、その後単行本として出版された。

関東大震災後の「円本ブーム」の仕掛け人も実彦である。当時、書籍は庶民が簡単に買えるものではなかったが、思い切り値段を下げ、全集のセットにすることで売上を伸ばすという戦略をたてた。手持ちの資金もなかったため、先に広告を出し、集まった予約金で本を出版するという手法だったようだ。

実彦宛の書簡類が薩摩川内市のまごころ文学館に収蔵されているが、掲載を許可していないのに新聞に広告が載り、怒った作家からの苦情の手紙が何通か残されている。

しかし、『改造』は原稿料が高く、作家が高額所得者となっていく道筋をつくったのも山本実彦である。多くの作家が実彦のもとで書くことをよろこんだ。

メディアミックスというのも今では当たり前だが、実彦がはじめたものだ。メディアミックスとは、同じ話題を異なるメディアで同時、あるいは波状的に取り上げることで宣伝効果を上げる手法をいう。たとえ

ば、実彦は、大正11（1922）年、アインシュタインを日本に招いた。まだ、ラジオ放送もない時代だが、新聞、雑誌、ニュース映画、書籍、講演といったメディアを横断して、アインシュタイン自身の人柄も功を奏して、国民的なブームになる。

物理学者の石原純、哲学者の西田幾多郎らのすすめがあったとはいえ、アインシュタインは、実彦の招きで乗船した日本行きの船の上でノーベル賞の受賞決定の報を聞くことになる。アインシュタインのノーベル賞受賞発表直後のスケジュールは世界で唯一実彦が握ることになったのである。

山本実彦はそれまでの、ただ本を作るだけの出版社から社会現象をつくる、ブームをつくる戦略的なメディアへと出版社、出版業界を替えてしまった。そのこと自体、功罪があると思うが、しかし、その変革への前進力はすさまじい。

『改造』は名前からもわかるように社会主義的な色合いの濃い雑誌である。しかし、実彦自身は社会主義が嫌いだったようだ。社会主義が流行しているので、雑誌として成り立つと判断したのである。

もともと、山本実彦は出版に興味があったわけではなく、政治家になりたいと考えていた。そのための手段として雑誌の出版があったのである。

そうした割り切りが社会的にインパクトのある雑誌『改造』を生んだともいえる。編集部には優秀な人材が集まり、実彦と衝突しながらも、社会主義を広める誌面作りで大衆の心をつかんだ。実彦は、自分の政治信条、思想とは関係なく、雑誌の発行部数が伸びるのであれば鷹揚に構えていた。

そうした社会評論の分野だけでなく、文芸にも実彦は力を注いだ。当時、文芸編集者として有名だった瀧井孝作を高給で引き抜くことで、芥川龍之介や谷崎潤一郎、さらに白樺派の志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎、里見弴らの作品を『改造』に掲載することができ、総合雑誌としての形を整え、売上を伸ばした。有島、里見の父親は実彦と同郷の薩摩川内市の出身でもあった。

山本実彦は、出版界にあって、次々と新しい試みをし、その多くが成功した。有無をいわさぬ強引さと、使うべき所には惜しまずにお金を注

ぎこむそのやりかたは、出版界を大きく変えていった。

岩谷松平も、山本実彦も、鹿児島の川内で生まれて、そこから一代で日本社会に大きなインパクトをあたえる企業を作り上げた。結局その会社は一代で終わることになるが、その先進性は、明治維新と同じように大きな変革と影響を残した。

センデガラッパ（川内河童）という言い方がある。進取の気性があることをいうといわれるが、もともとの意味は、人の足を引っ張る、すなわち、自分が前に出るために人の邪魔をするという意味だという。センデガラッパとよく対で使われる加治木鳥という言葉も、何にでも興味を示し、自分の意見を主張する性格を表しているのだという。これも進取の気性ということである。同時に加治木鳥もやはり人の足を引っ張るという負の面を持っている。

古い価値観からすれば、好奇心を持つということ、自分の意見を主張するということ自体が負の側面であった。しかし、好奇心を持つ、自分の意見を主張するというのは、新しいことをしていく上で、必要不可欠なことだ。

タイトルに使った「進取の気性」という日本語を、私は英語の enterprise の訳語として知った。高校生の時だった。日本語を英語を介して知るという経験にいささかという以上に戸惑いながら、私の中で「進取の気性」は不思議な語感を持って育っていった。私にとって「進取の気性（enterprise）」は、日本人離れした感覚、日本人にはない心性のように思われた。そしてまた、英語では enterprise は「企業」という意味も持っているということもこの語を複雑に感じさせていた。

「起業」ということばが流行しているが、「企業」も動詞としてみれば「業を企てる」ということである。「進取の気性」と「企業」の二つの訳語があるというよりは、「進取の気性」と「企業」はそもそも同じ根をもつことばなのだろう。

島津斉彬の集成館事業こそはこの両方の意味をもった enterprise そのものだったのかもしれない。西郷隆盛の明治維新、調所廣郷らの石橋事業、伊地知季安の文書探訪、田代安定の南方探索、岩谷松平の東京での事業、山本実彦の出版業、こうしたものすべてが「進取の気性（enterprise）」であり「企業（enterprise）」、あたらしい業を企てるという

ことだったのでろう。

鹿児島県人がもっている潜在的な志向性というのはこうした進歩性、先進性、進取の気性なのかもしれない。今、私は鹿児島に暮らしていて、残念ながらそうした気風は見えていない。

しかし、何かに打ち込んでいる人、一つの道を突き進んでいる鹿児島県人を見ると、そのすばらしい集中力と持続力、そして飽くなき好奇心と熱心な自己主張に感心する。伊波普猷も「薩州人の心の中には、他国人のとても真似の出来ない没我的なところもあるようです」と評している。

鹿児島の先人達の爆発的な前進力、突破力をみていると、鹿児島が未来に残すべき遺産とはこうした見えないところに、桜島のマグマのようにたまっている静かな情熱なのかもしれないと思える。

伊波普猷は、鹿児島県人が「只今では現状維持の人民になっていますが、またいつかは現状打破の人民になることがあるでしょう」と言っている。私にも、近い未来に鹿児島がまた enterprise する日が来るように思える。

## 参考文献

伊波普猷 1923年「一琉球人の薩摩観」『沖縄教育』第131号（大正12年12月1日発行）（引用にあたっては、読みやすさを考慮し、一部の漢字をひらがなにひらき、読点をくわえた）

木原安妹子ほか 1995年『かごしま 西田橋』南方新社

二宮公紀 1992年「甲突川五大石橋の保存問題と近年の経緯について」『土木史研究』第12号

森赫子 1956年『女優』実業之日本社

日僑文化事業股份有限公司 2013年『NARUHODO THE TAIWAN』Vol.312 美好台湾雑誌社

（鹿児島純心女子大学教授・同附属博物館館長）